

第2回コミュニティスクール検討会の概要

■概要

日時	令和6年3月7日(木) 午後3時30分～午後5時30分
場所	オンライン開催
出席者 (敬称略・50音順)	上沼 昭彦、河西 哲也、塩原 雅由、城村 義人、傳田 智子、早坂 淳、 伴 美佐子、堀田 茂樹

■主な意見

○学校運営参画は誰にとってどんな意味があるのか

【地域住民にとって】

- ・地域のいろんな人たちが、学校や子どもたちを取り巻く状況がどうなっているかを把握することができる。そして、学校と一緒に考えることができる。
- ・頼まれたときだけのお手伝いよりは、作っていく段階から関われば、関わる側の当事者意識も高まる。
- ・子どもの成長を見る機会は、関わる方にとっても非常に大きな学びでもあり、大人自身の自己肯定感に繋がる。

【子どもにとって】

- ・地域の方と関わることで得られるプラスのフィードバックによって、自己有用感が高まり、それをもとに自尊感情が高まる。このサイクルが次の学びへの意欲に繋がっていく。
- ・学校運営委員会に参加することで、子どもたちも主体的に「学校がこんな風になってほしい」ということを大人と一緒に考えるようになった。
- ・多くの大人が関わって教育をすることで、子どもたちの成長や生き方が大きく変わるのではないかな。
- ・多くの大人との繋がりの中で子どもが生きていくことで、子どもの自己肯定感・有用感・チャレンジ精神のような非認知能力が上がっていく。

【学校にとって】

- ・学校運営協議会を導入した学校は、学校づくりのサイクルが地域に開かれた教育課程を実現する好循環サイクルとなっている。好循環サイクルは学校の日常に大きな変化をもたらしている。
- ・学校長の作成したビジョンにより担任が自主的自立的に教育活動を行うようになっている。

○学校運営参画への負担感・不安感を充実感に変えていくには

- ・地域住民にとってはつながり続けていくことがすごく大事。
- ・子どもたちへプラスのフィードバックを与えることが重要であることを地域住民が自覚していること。教師は子どもたちが本気で自分のこととして関わるための課題設定を授業で行う必要がある。
- ・互いに役割が見えてくることで不安感が消える。学校側もどこまで関わってもらえるかが分かることで悩まなくてもすむ。
- ・大人が生涯学び続ける背中を子どもたちが日常的に目にすることで、その姿に興味関心をもった子どもや先生から自然と地域との協働活動が生まれている。

○今後の学校と地域連携に求めること

- ・学校としては、地域と繋がることの必要感も悩みもあったが、「もう開かなきゃいけないんだよと、地域をまずは受け入れましょう」というところをスタートにしたことが、スムーズな連携につながった。学校を地域に開いていくことを学校側も意識を統一してやっていく必要があるのでは。
- ・教育の場を学校だけで独り占めしないで欲しいなって思っている。学校における教育は教室のみがやるのではなく地域住民や企業人が、そこで一緒に作っていくことが必要ではないか。
- ・学校は、地域の方々々に Welcome としたいができない現状もあるのでは。理念としてはとても大事だが仕組としてどう落とし込んでいけば仕組として社会実装できるか。
- ・学校と地域資源をつなぐ役割として公民館の活用が有効ではないか。